

令和元年（食と観光対策特別委員会）開催状況

開催年月日 令和元年6月19日（水）  
 発言者 日本共産党 宮川 潤 委員  
 報告者 観光振興監、誘客担当局長、  
 観光局参事（小林）

質 問 要 旨	答 弁 要 旨
<p><b>一 炭鉄港の日本遺産認定について</b>                      （宮川委員）                      私からは炭鉄港と夕張の模擬坑道火災についての2点質問させていただきたいと思っております。                      まず、炭鉄港ですが、日本遺産に認定されました。私も心から嬉しく思い、お祝いを申し上げますとともに、炭鉱の記憶マネジメントセンターをはじめとした、元炭鉱職員や関係者、地元の住民の皆さんの地道な努力の賜物として、敬意を表するものであります。</p> <p><b>（一）道のこれまでの取組について</b>                      （宮川委員）                      私は2017年9月、三笠市の旧住友炭鉱、赤平市の旧住友赤平炭鉱を視察し、本会議において、炭鉄港の「産業遺産を生かした地域振興の取組を推進すべき」と求めたところ、知事から「日本遺産の認定に向けた活動も含め、地域と連携して、引き続き、積極的に取り組む」との答弁を頂戴したところであります。                      このやり取りの後、道はどのように取り組んできたのか。また、今回の日本遺産認定を受け、どのように受け止められているのか、まず伺います。</p> <p><b>（二）炭鉄港の今後の期待及び道の関わりについて</b>                      （宮川委員）                      私どもが視察した際、空知炭鉱の記憶マネジメントセンターの酒井常務理事は、「私たちの使命は地域を元気にすることです。鉄もコンクリートもいつかは崩れてなくなる。物はなくなってもそこで活動した思いは残り、今に繋がるのがことが大事だ。」と述べておられました。                      今後の炭鉄港が、どのような役割を果たしていくことが期待されているのか。また、道が積極的な支援をすることが期待されていると思っておりますけれど、道として炭鉄港にどのように支援し、どのように関わっていくつもりか伺います。</p> <p><b>（二）一 炭鉄港の今後の期待及び道の関わりについて</b>                      （宮川委員）                      炭鉄港の日本遺産認定にあたり、炭鉱の記憶マネジメントセンターをはじめ関係者のみなさんが、大変な情熱を傾けてきたということ、理事者皆さんもご存じだと思いますし、道としても、関係者や元炭港職員の方々と一緒に喜ぶ気持ちもあるはずだと思います。                      観光振興監から、日本遺産認定後の活動について、関係者と心をつなぐ支援をしていく気持ちを十分に表していただきたいと思っております。</p> <p>（宮川委員）                      ぜひ、心をこめて支援していただきたいと思っております。</p>	<p>（観光局参事（小林））                      炭鉄港に関して、これまでの取組についてであります。道では、空知・後志・胆振の3振興局が連携し、日本遺産の申請者である12自治体をはじめ、官民55団体で構成する「炭鉄港推進協議会」に参画しながら、地域における機運の醸成を図るとともに、道教委や観光局など関係部局で構成する「日本遺産連絡調整会議」において、全庁一体となり、日本遺産認定に向けた取組を推進してきたところであります。                      この度の炭鉄港の日本遺産への認定により、地域の貴重な文化財への理解が進むとともに、観光資源としての活用の促進も期待されるところでございます。</p> <p>（観光局参事（小林））                      炭鉄港への今後の支援などについてであります。この度、日本遺産に認定された炭鉄港は、今日の本道を築いた基幹産業の歩みを伝える貴重な施設等で構成されており、歴史的価値を有するものであることから、観光面からの効果も期待できるものと考えているところであります。                      今後、道といたしましては、北海道観光振興機構などと連携し、こうした炭鉄港の構成遺産を観光資源として有効に活用することで魅力ある観光地づくりを形成する地域の取組を支援してまいりたいと考えてございます。</p> <p>（観光振興監）                      この度の炭鉄港への日本遺産認定についてでございますが、この度の認定は、地域の皆様方の熱意とご努力が、実を結んだものと考えてございまして、道といたしましては、今回の認定を契機として、地域の方々と連携をさらに密にし、炭鉄港の構成遺産を活用した地域の観光の取組を支援してまいりたいと考えてございます。</p>

質 問 要 旨	答 弁 要 旨
<p><b>二 夕張模擬坑道火災について</b>  <b>(一) 夕張市石炭博物館の位置づけについて</b>  (宮川委員)  次に夕張市の石炭博物館についてであります。本道の歴史を顧みたとときに、石炭を産出し、日本のエネルギーを支えてきたことはかけがえのない役割を果たしてきたものと考えております。本道の産業、経済、雇用の中軸としてまた地域の街づくりにも大きくかかわってきましたが、エネルギー政策の変更によって街ごと産業ごと移り変わってしまったことは本道の歴史を語る上でも極めて重要なことだと思っております。その石炭に特化した、炭鉱労働者の暮らしや行動、街づくりまで展示した博物館は他に類を見ない施設であり、文化的にも観光の面でも貴重だと考えるものであります。どのように位置づけられておられるのか伺います。</p> <p>(宮川委員)  ただいま文化財として、それから観光面からという点からご答弁がありましたけれども、私は文化財という点から重要であるということが前提となつて、観光的にも重要だという関係になっているという風に考えます。文化的な価値はないけれど、観光には役立っているというものはあるにはありますけどそういうことは長続きしないことが多いと思われます。炭鉄港や石炭博物館は文化財として非常に重要であります。</p> <p><b>(二) 復旧後の支援などについて</b>  (宮川委員)  次に模擬坑道火災からの復旧についてであります。私ども日本共産党道議団は、6月12日、現地の調査を行ってまいりました。消化のための注水により水没した天龍坑の坑口は土嚢で塞がれ、その外に坑道の上部を押さえていたヤギが真っ黒に炭化して小さくなって原型をとどめていないようなものが置かれておりました。火災の酷さを物語っております。模擬坑道は現在もまだ水没した状態であり、ポンプで排水するためのホースを坑内に引き込むのも大変なことだと伺っております。水を排出した後に内部の損傷を調査し修復するには多大な費用を必要とするものと思われます。歴史的、文化的にもまた観光の点でも重要な施設である石炭博物館の模擬坑道は他に代わるものがないという施設であることから市の意向を尊重した上で、道と国の支援を必要としているものと考えますが、考えられる支援にはどのようなものがあるのか明らかにして頂きたいと思ひます。また、炭鉄港の一つの核となる施設の復旧に当たっては、他部との連携を図ることが需要であります。一方で、復旧後においてはどのような支援を考えていますか。模擬坑道の重要性を十分踏まえてご答弁願いたいと思ひます。</p> <p>(宮川委員)  現状を申し上げたとおり、坑道が水没したままの状態であり、排水のためのホースを引き込むことさえ大変な困難であります。排水をして見ないとどれほどの損傷か復旧のめどが立たないという状態であります。道をあげて、また国の支援を得て復旧と保全へと力を注いで頂くように指摘をして質問を終わります。以上です。</p>	<p>(観光局参事(小林))  夕張市石炭博物館についてであります。炭鉄港を構成する文化財のひとつであり、国の登録有形文化財に指定されている「旧北炭夕張炭鉱模擬坑道」は、実物の炭層や採炭機械を見学できる国内でも貴重な施設であり、文化財としての価値はもとより、観光面からも地域における重要な資源であると認識しているところでございます。以上でございます。</p> <p>(誘客担当局長)  復旧に関する対応などについてでございますが、被災した模擬坑道の復旧につきましては、今後、施設を管理する夕張市の検討状況やご要望などをお聞きしながら、例えば、国の特例交付金・特別交付税や被災制度、さらに道の地域づくり総合交付金など、いろいろご要望をお聞きしながら、その活用なども含めて、その方向性について、検討していくことが重要と考えております。また、施設が復旧した際には、市や関係の方々と連携いたしまして、特に私ども観光サイドでございますので、誘客促進に向けたPR活動、こういったことにも努めていく考えでございます。以上でございます。</p>